
とある魔術のカルスマ

カラビナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔術のカルスマ

【Nコード】

N4546X

【作者名】

カラビナ

【あらすじ】

神裂火月^{かんざき かつき}。神裂火織と言う偉大すぎる姉を持つあまり挫折し、魔術から逃げ、彼は学園都市にいた。クラスメイトである上条当麻、魔導書図書館インデックス、ルーンの魔術師ステイルに加え、姉の神裂火織が現れて。

科学と魔術が交わる時、物語は始まる。

ブローグ

その場所は一瞬にして変わり果てた。

本来であるなら、上空には雲一つない青空。

緑一面の草原に風が吹き、草の擦れる音が緑の匂いを運び、その場に仰向けになれば自然の一部となれるだろう。

自然。

その一文字で覆い尽くされたその場所は、旅人の楽園だ。

匂いを運ぶ風は体を通り抜け疲れた体を癒やし、鳥達の囀りは疲れした心を癒す。

僅か数分の出来事。

ぶつかり合う二つの影が、その地を生き物の住み着かぬ地獄の焼け野原へと変貌させたのだ。

ひと振り。

轟！ と炎の大蛇が地面を走った。

太陽から吹き出る紅炎の様に、渦を巻きつねりを上げてもう一つの影へと襲いかかる。

大蛇が口を開き、その人影を飲み込むと火柱が上がった。

上空数十メートルにも及ぶ炎の柱は、周囲を焦がし酸素を喰らい、地獄を模倣する。

摂氏は三〇〇〇度を超えていた。

人は二〇〇〇度以上の高熱で焼ける前に、溶けるらしい。

周囲に生き物はおらず、草むらへと燃え広がった炎は、今も尚広がり続けている。

その火柱を見つめる一つの影。

茶色い長い髪は腰まで伸び、炎に照らされる事によって黄昏色に染まっている。細い眉に赤いルビーの様な瞳。アオザイの様な服に

包まれたその体のラインは服の上からでも分かるほど細く、その腰に提げられてある鞘が一つだけ浮き出た存在になっている。

その容姿を見て、手に握られた刀を振り回す姿を誰も想像できないだろう。

それほど端麗な存在である少女は、その深紅の瞳で炎の中を見つめる。

ジリジリと炎を生み出した刀の先端に、まだ炎の余韻が残っていた。

それを軽く振るい、少女は炎の中心へと駆け出す。

一度地面を蹴るだけで、その体は重力の影響を受けていないかのように前進した。

右手に握った刀を振り上げ、その火柱目掛けて振り下ろす。

空気すら切り落とせそうな斬撃に、その炎は真つ二つに切り裂かれるハズだった。

ガキン！ と激しい金属音。

少女の刀が炎に食い込む形で止まっていた。

「この程度で私を殺れるとも思っただのか？」

炎の中心から放たれる声。

同時に、吹き上げる強風が炎の柱をむしり取り、その中心から姿を表すもう一つの人影。

黒い神父服を着ていた。

長い白髪に白い肌。男にも女にも大人にも子供にも見えるその容姿にどの様な名詞が合うだろうか。

「無論、この程度で貴様が逝くなど思っではないない」

五〇センチほどの距離を残して目と目を合わす二人。その間に交える刀とねじくれた銀色の杖。

「ならば、なぜ手を抜く必要がある？」

「それは貴様も一緒だろう」

互いの武器を弾いて距離を取った。

その距離はおよそ十メートル。だが、二人にとってそれは目と鼻

の先でしかない。

僅か一步足らずで、その距離が埋まってしまうからだ。

「手を抜いたのではないアレキスター・クロウリー。貴様が生かすべき存在かどうか今一度確かめていただけた。だが、やはり貴様が起こした波は世界に波紋を広げる。私はそれを見過ごす訳にはいかない」

「さすがは『恩寵を受けし者』と言うべきか。だが、君は何も気づいていないようだ。もし気づいていながら来ているのなら、なかなか見上げたモノだが」

辺りに音は無く、二人の会話だけが響いている。

燃え広がっていた炎は先ほどの突き上げる様な突風によって全て消え去っていた。

「私はここで死ぬつもりはない。やらなければならない事が山ほどあるのだな」

「あれだけの功績を残しながらまだ何かを求めるその貪欲さは尊敬に値するが、その行いが世界のバランスを乱すと分かっている、逃すと思うのか？」

少女は刀を相手に突きつける。

透き通る様なその刃に映る瞳は刹那、黄金色へと変化する。

左目は燃える様に赤く、右目は静けさをまとった黄色。

青かった空は黄昏に染まっていく。

「その目だ。世界のバランスを取ると共に、その逆をも成し遂げる。是非とも手に入れたいものだ」

両者は再び激突する。

大気同士がぶつかり合い、天すら悲鳴をあげる。

行方は分からない。

分かっている事は、その場所が後に大きな湖となり、再び生命溢れる自然に戻ったと言う事だけ。

episode 1

才能と言うモノは酷いモノだと思う。

例え、努力しようとも絶対に超えられない壁。

そんなモノにぶち当たった時、人はどうするか。

立ち向かうのか。

それとも逃げるのか。

この学園都市にも、逃げてきた者がいた。

かんざき かつき
神裂火月。

魔術側の人間でありながら科学側へと逃げた者。

しかし、魔術とは『才能の無い人間がそれでも才能ある人間と対等になる為の技術』であり、魔術においても魔力すら練ることが出来なかった彼に、超能力が扱えるハズも無く、無能力者。レベル0

学園都市が叩き出した答えがそれだった。

——とある魔術のカルスマ——

「待ちなさいって言ってんでしょーがー」

早朝マラソン。

まさにその言葉がピッタリだと思いながら、神裂火月は学園都市内を走る。

七月二〇日。

夏休み初日であるにも拘わらず、なんともハードな朝を迎えていた。

「おい当麻！ 待てって言ってるぞ！？」

真っ黒な前髪を風に靡かせながら、隣を走るクラスメイト上条当麻に話しかける。

「バカやろう！ 今止まったらこっちは今日一日アイツの相手をしなくちゃなんねえだろうが！」

「ってか何で俺まで走ってんだ！？」

「んなもん知るか！ 止まりたけりゃ一人で止まれ！」

かれこれ二キロは走っただろうか。

人影の少ない学園都市を颯爽と駆け抜けていく三つの影。

逃げるは二つ。

神裂火月と上条当麻。

追いかけるは、朝ご飯を食べるべく立ち寄ったファーストフード店で偶々出会った御坂美琴。

学園都市に七人しかいない超能力者^{レベル5}の第三位、超電磁砲^{レールガン}の異名を持つ、最強の電撃姫だ。

対する二人は無能力者^{レベル0}。

にも拘わらず、第三位が鬼の形相で追いかけてくる理由は彼の隣を走る上条当麻にある。

イマジンプレイカー
幻想殺し。

あらゆる異能を打ち消してしまうその右手。

学園都市の身体検査^{システムスキャン}でも測定する事が出来ないその力。故に無能力者のレットルを貼られている上条当麻であつたが、その無能力者に能力を防がれた御坂美琴は、ことあるごとにこうして上条当麻と決着を付けるべく追いかけているのだ。

もちろん、御坂美琴は上条当麻の右手の特殊な力がある事を知らない。

「いいんだな！？ 止まるぞ？ 止まっちまうぞ？？」

対して、神裂火月は、正真正銘の無能力者である。

何もない。

上条当麻の様な右手もなければ、超能力のちの文字すらない。才能なし。

学園都市までやって来て、新たな自分を作り出そうと心に決めた事もあつたが、今となっては遠い思い出だ。

巻沿いを喰らいたくないと思った神裂火月は、乳酸によって動かなくなりつつある足をついに止めた。

膝に手について、大きく深呼吸。

そもそも、自分が逃げる必要なんてないのだ。

電撃姫の狙いは上条当麻。

一緒にいるからまるで自分も狙われている様な感覚に陥ってしまったが、止まってしまうばこっちのもの。

（悪く思うなよ、当麻）

予想通り、電撃姫は火月の横を猛スピードで駆け抜けていく。

今までの速度で走っていたと思うと、人間の体つてのは凄いなあ、なんて思ってしまう。

「だああああ、ホントに止まりやがったなあああ！」

なんて言う、通訳すると、『裏切り者』と言う声が聞こえてきたが、やはり一番大切なのは自分の体だ。

これがあつてこそその人生だ。

肺の中に残っている空気を一度全て吐いて、新しい空気を入れる。肺ではなく、腹式で行う事で一度により大きな酸素を取り込むことができる。

しかし、そこでハツとする。

そんな些細な事ですら、思い出したくない過去に連想させてしまう。

こことは全く正反対の世界。

魔術。

そんな世界から逃げてきた。

だが、ただでさえ才能の無い者が生み出した魔術さえ扱うことが出来なかった自分に、才能のある者が扱う超能力が身につく訳がなかった。

そんな事は分かっていた。

しかし、もしかしたらと言う気持ちがあった。

違う形でもいいから、姉に近づけたらと。

「……食いそこねた朝飯でも食べるか」

上条当麻には悪いなあ、と思いつつ、嫌な気持ちを吹き飛ばすために先ほどまでいたファーストフード店に戻っていった。

episode 2

ファーストフード店で一人の朝食を済ませた神裂火月は、つい先ほど別れた上条当麻の心配を少しだけしつつ帰路についていた。

夏休み初日には中々の朝だったと自負する。

学園都市に来て七年。

魔術の世界にいた頃では考えられない様な最先端の数々。

風力発電用のプロペラがいたる所でグルグルと回り、街中をドラム式の掃除ロボットが徘徊をしている。加えて秒刻みに予想される天気予報。

そんな事は既に当たり前になっていた。

だからこそ、そのいつもと違う感覚に戸惑いを覚えていた。

「この感じ……」

七年間の学園都市での生活で初めて感じる、この体に流れ込む異質な力。

「誰かが、魔術を？」

学園都市は超能力者の街と言っても良い。

魔術とは異なり、才能を持つ者が扱う能力。

そんな街で魔術を感じる事など今までなかった。

「一体誰が……？」

——とある魔術のカリスマ—— episode 2

たどり着いたのは街中の裏路地だった。

辺りに人が居ないことから恐らく、『人払い』が刻まれているのだろう。

魔力の流れを感じながら進まなければ、神裂火月もこの場所にはたどり着けなかった。

そして確信する。これは魔術師の仕業だと。能力者に魔術を扱うことは出来ない。

火月自身も魔術を扱う事は出来ないが、その仕組みを理解し、感じる事はできるのでこの場所が分かった。

「……俺はどうしたいんだ？」

ここに来て、そんな疑問が湧いてきた。

感じるがままに歩いてきた火月だったが、この場所に来て一体何が出来ののだろうか。

魔術は使えない、能力もない。

そんな自分が、思い出したいくない過去に触れるだけのこの場所に一体何をしにきたのか。

裏路地の近くまでやって来て、その中へ一歩が出ない。

いや、何の為に一歩を踏み出せばいいのか分からない。

行つて何になると言うのか。

一度は捨てた魔術。それが近くにあるからとオメオメとやって来て、一体自分はなんなのか。

と、

轟！ と爆発と共に炎が舞い上がった。

「クッ……！」

裏路地の細い通路を通して、熱風が顔にまで伝わってくる。

「炎の魔術……ッ」

伝わる熱風を遮るために、手で顔を防ぐ。

一瞬、そのまま通路に飛び込もうとする自分がいた事に気がついた。

行つて何になるのか。

先ほどの自分に問いかけた質問だったが、今一度問いたい。

恐らく、中で誰かが襲われているのだろう。

それが、能力者なのか、同じ魔術師同士なのか分からないが、一

人でこんな学園都市の真ん中で魔術を使うわけがなかった。

中に行こうか行くまいか、他人には決して分からない葛藤が自分の中で起こっている。

刹那。

第二波が飛んできた。

裏路地の狭い入口を覆い隠すような炎。

こちらから踏み込ませない様にするためではなく、内側の誰かを閉じ込める為に放たれたのか。

ジュワ、と魔力の供給を失った炎が見る内に消えていく。

魔術で生み出した炎だが、炎は炎だ。

高く舞い上がって燃えていた部分の建物の壁は、ものの見事に黒く焼け焦げていた。

その中から、カッン、とコンクリートを靴で叩く音が近づいてくる。

暗闇の中から、現れたそれは、

「逃げた、か。うまく建物の中に入られたかな？」

黒い神父服を着た男だった。

身長は二メートルはある長身で、髪は茶髪を無理やり赤で染込み、目元にはバーコードのタトゥーが刻まれてあった。

くわえたタバコをゆらゆら揺らし、独り言を呟いている。

「まあ、あれの着てる『歩く教会』の魔力を辿れば直ぐに見つかるだろうし、科学側の本拠地で助けを求める事も出来ない。時間の問題だろうね」

雰囲気違った。

学園都市で普通の生活をしていれば出会っことの無い、独特の雰囲気。

その、魔術師は独り言を終えるとようやく火月の存在に気がついたようだ。

「ふーん。珍しい事もあるもんだね。人払いをかけているのに迷い込んで来るなんて。術式に欠点があったか？ 簡単なだけに少し手

を抜いてしまったかな」

火月に対して放っている言葉ではない。

これもまた独り言に近いのだろう。

相手が理解出来ない事をいいことに、つらつらと言葉を並べて話している。

「心配することはない。僕たちが君たちに手を出す事はないからね。重要物件でも匿わない限りね。まあ何を言っているかも分かっていないだろうけど」

そう言いながら、魔術師は裏路地を引き返していく。

恐らく、彼の言う『あれ』を探しに行ったのだろう。

しばらくすると、周囲に張り巡らされていた人払いの魔力も感じなくなつた。

重い足がようやく動いた。

「ッ……」

久々の目だつた。

何人もの人を殺してきたであろう、冷たい目。

魔術師の中にはああ言う目をした者がいる。

この学園都市では目にする事が無かつた目だ。

ゾクゾクと今になって色んな感情が湧き上がってきた。

やはり、来るべきではなかった。

嫌なことばかりがよみがえる。

「クソ……」

言葉で表せない感情を胸に抱いたまま、再び帰路へついて行く。

魔術師の追っていた者は誰だったのか。

気にはなる。

だが、気にした所でどうなる。

気にした所で何も変わらない。

何か劇的な変化でもなければ。

episode 3

それから時間、何も手がつかずただ時間が過ぎて行くだけであつた。

昼も済ませ、部屋に戻るわけでもなくブラブラと街中を歩き続ける。

心ココにあらずと行った所か。
忌まわしい過去との遭遇。

体の中にぽっかりと穴が空いたように、ふわふわと気持ちが落ちて着かない。

考えない様にしようとしても、強制的にインストールされたデータの様に考えが頭の中を駆け巡る。

あの魔術師はどうしたのか。
魔術と科学は互いに干渉し合うことを行わない。

互いの両分を決めて、その一線を越えないようにしているのだ。にも拘らず、この科学の総本山である学園都市に魔術師がいた。これを意味するモノはなにか。

(つまり、そこまでしてやらなければならない事があるってこと)
魔術師は誰かを追いかけていた。

その人物は魔術師が科学の街に入り込まなければならぬほどの人物と言う事だ。

(一体誰を追いかけてたんだ)

と、そのまで考えて八つとする。

「……バカか、何を考えてるんだ」
考えた所で何になるのか。

能力者でも魔術を使える訳でもない。
そんなちっぽけな存在が考えた所で何か出来る訳がない。
態々、そんな事をする意味があるのか。

「……けど」

魔術を知っているモノとして、このまま放っておいても良いのか。それがずっと引っかかっていた。

——とある魔術のカルスマ—— e p i s o d e 3

日が傾き、街に夕焼けが差し込もうとしていた。本当にただ歩いていただけ。

正直に言えば、とても無駄な時間を使ってしまっていた。グダグダせずに、ビシッと決めることが出来たのならば、こんなにもモヤモヤした気持ちを引きずる事もなかったであろうが、神裂火月はこう見えて意外と優柔不断だ。

目の前に出されればそれに素直に従うことはできるが、自分から選択するとなるとなかなか決まらない。

今までで一番の決断は、この学園都市に来ると決めたこと。それから今まで大きな決断はしたことがなかったかもしれない。ただ単に、そのような場面に出くわさなかっただけかもしれないが。

「クソ……気分が悪い」

決断が速い者から言わせれば、グジグジやってる時間がもつたいたいと言われるかもしれないが、それが出来ないモノにしか分からないもどかしさみたいなモノが胸に溜まっていた。

なぜ、ここまで気になるのかは分からない。

中途半端な正義感。

優柔不断。

そして、過去の出来事が、こんな状態を作り出しているのだろう。

「……帰るか」

自分の影がかなり長くなっていた事に気がついて、ようやくちゃんと帰路に付くことにした。

そういえば、上条当麻は大丈夫だったのか。

ふと、そんな事が頭の中に湧いてきた。

彼の手には幻想殺しと呼ばれる力がある。
イマジンブレイカー

相手が超能力者^{レベル5}であろうが、能力を多様してくる相手なら恐らく大丈夫だろうが。

（当麻の右手は、魔術にも通用するのだろうか……ああ、クソ。何で魔術につなげるッ）

そんな自分に嫌気がさしながらも、着々と自室へと歩を進めていた。

夕焼け。

昼と夜の間を司る黄昏。

火月はこの色が嫌いでは無かった。

いつも見慣れたこの色。

しかし、黄昏の後に訪れるのは、暗い夜。

太陽が沈み、月と星が空を支配する時間。

（……少し急いだ方がよさそうだな）

自然と足が早くなる。

時間はそれほど掛からなかった。

寮まで後一步の所までやってきた。

が、妙な違和感を感じる。

日が暮れて夜が訪れようとしているにも拘わらず、寮に近づくと意外に明るいのだ。

まるで何かが燃えている様に。

「……この感じ……まさか、ッ!？」

ガラガラガラ、と自転車が倒れる音が聞こえた。

加えて、その隙間を転がる一つの人影。

それこそ、勢いを殺しきれずに地面を転がる。

「と、当麻!？」

その影は上条当麻だった。

その服は所々が擦り切れ、焼け焦げ、当麻自身からも大量の汗、

運動によるものではなく冷や汗に近いものがある。

何があったのか。

それを訊こうとはしなかった。

なぜなら、後ろから感じる独特の力の流れがその正体を訴えていたからだ。

顔を振り向かせ、その禍々しいそれを見る。

明るさの正体が、そこにあった。

炎。人の型をしたその炎は六階の手すりに張り付いていた。見えない壁に遮られる様に立ち往生している。

「火月……」

上条が歯を食いしばりながら立ち上がる。

「今、寮には上がるな。詳しくは説明出来ないけど、今は危ないんだ」

そう言いながら、上条も上を見上げる。

そこに見える炎の巨人。

自分の敵を確認するように上条は一度それを睨み、そして立ち上がる。

「火月、通報しといてくれないか。俺の携帯壊れちまって。それに上にはまだインデックスがいるんだ。行かないと」

上条は携帯を取り出してそれを火月に放り投げた。

火月はそれを受け取り、中を開くと確かに画面は割れて電源も入っていない。

だから預かつといてくれ、と上条は歩き出す。

「待てよ当麻……」

神裂火月は多少優柔不断だ。

能力もなければ魔術も使えない。

だが、

「魔術師なんだろ」

ビクッと上条が止まった。

振り返る上条は驚愕の表情だった。

「火月、お前……何で」

「話しは後だ」

そう言っ、携帯を上条に返す。

魔術が使えなくても、魔術の知識は持っている。

相手が魔術師なら、上条当麻一人で行くよりかは、格段に良いはずだ。

それに、上にはまだ上条の知り合いが残っているらしい。

そんな状況にもなっ、魔術が使えないとかどうこう言っている場合ではない。

優柔不断だが、

友達がこれから危険な場所に行くとなっ、そのままにして置けるほど、神裂火月は落ちこぼれた訳ではなかつた。

「教えてくれ当麻、相手はどんな奴だつた」

episode 4

上条当麻の話を限りでは、どうやらあの炎の魔術師で間違いなさそうだった。

そして、上条の言うインデックスと言う少女。

「その子は当麻の知り合いか？」

火月と上条は階段を駆け上がりながら話す。

「知り合いっていつても今朝出会ったばかりなんだけど」

「その子も、魔術師なのか？」

「自分ではそう言ってた。ただ魔術は使えないって」

「炎の魔術師はその子を狙ってるんだろ？　なんでだ？」

「一〇万三〇〇〇冊の魔道書、それが狙いだって言ってた」

ビタ、と火月の足が止まる。

火月が先行する形となっていたので、上条はぶつかりそうになっ
て止まった。

「一〇万三〇〇〇冊、だって？」

「あのスタイルって奴はそう言ってた。アイツの頭の中には一〇万
三〇〇〇冊の魔道書が暗記されているって」

魔道書が一〇万三〇〇〇冊。

魔術を知る者だからこそ、その危険度が明確に分かる。

（そんなモノ、使い方によっては世界を破壊する事だってできるじ
やないか）

火月の様な人間が一冊目を通すだけでも、廃人確定の魔道書を一
〇万三〇〇〇冊も記憶した少女。

そんな少女がなぜ学園都市にいるのかは分からないが、魔術師が
この学園都市に侵入する理由には十分過ぎるモノだった。
と、

そこで目に入った大量の紙切れ。
紙に刻まれた大量のルーン文字だ。

「ルーン文字、か」

火月がボソリと呟いた。

「って事は、これを全部どうにかしないとあの炎の化け物を倒せないってことか」

「当麻、何でそんな事を知ってる？」

「インデックスが呟いてた。あの魔女狩りの王^{イノケンティウス}って奴を倒すにはルーン文字を全て破壊する必要があるって」

「一〇万三〇〇〇冊の魔道書を記憶していると言うことは、それだけの大量の魔術に関する知識を持つと言う事。」

「なるほど、だったらさっさとルーンを破壊してそのインデックスって子を助けに行こう」

「でも、これだけの量の紙をどうやって？ 一枚一枚剥がしていつてたら時間が足りないぞ」

「これはルーン文字なんだ。重要なのは紙じゃないんだ。その文字に意味がある。だから、紙を剥がす必要なんてないんだ」

そして、火月は一つのボタンに手を伸ばす。

——とある魔術のカルスマ—— episode 4

不意に鳴り出した警報音。

そして、降り注ぐスプリンクラーからの水滴。

魔術師、ステイル・マグナスにとって、これほど不愉快なモノはなかった。

「まさかこんなモノで魔女狩りの王を消せるとでも思ったのか」
そんな理由で服を濡らされたかと思うと、頭の中の血管がちぎれそうだった。

近くに設置されてある火災報知器を睨みつける。

警報機は鳴らすのは簡単だが、こちらから止めることは出来ない。

「……エレベーターが止まってるなんて事はないだろうね」

非常事態の時にはエレベーターは止まってしまふと聞いたことがあったので、そうなってしまうえば憂鬱でしかない。

目の前に倒れている白銀の少女、インデックスを背負って、一階まで階段で降りるのは正直勘弁してほしかった。

少女がいくら体重が軽いといっても、一人の体重と言うのは馬鹿にはできない。

それに、意識が途切れ脱力した人間は普段以上に重く感じてしまうモノだ。

が、

そんな思考は、直ぐに頭の片隅へと消えてしまった。

その耳が誰かが階段を駆け上がってくる音を捉えたからだ。

その音はあつという間にこの階へと駆け上がって来て、ザッと地面のコンクリートに足を滑らせるようにして止まった。

(だれが?)

そこにいたのは、先ほどのツンツン頭の少年と短髪黒髪の少年だった。

(自動追跡の魔女狩りの王はどうした?)

一度標的をロックしてしまえば、絶対に逃げ切る事は出来ず、その者は焼き尽くされてしまうハズだった。

今回の場合はルーンを建物内にしか配置していないが、それでもこの建物内であるなら、どこまでも追いかけて焼き尽くす。

それなのに、

「インデックスから離れる。魔術師!」

その少年は鋭い目付きで睨みつける。

魔女狩りの王がいるハズの階をも通り抜けて。

「魔女狩りの王はどうした、魔女狩りの王!」

「ルーンを刻むんだったら壁にでも刻み付けるべきだったな」

言葉を放ったのは、ツンツン頭の少年ではなく、よく見れば昼間に会った少年だった。

その言葉でステイルはハツとする。

上部より降り注ぐスプリンクラーからの水滴。

ステイルが刻んだルーンはコピー用紙だった。

紙は水に弱い。

何百何千ものルーンを仕掛けていたとしても、その水がすべてのルーンを破壊してくれる。

魔術師ステイルは一瞬後ずさりしそうになるが、

瞬間、エレベーターの扉を飴細工の様に溶かしながら破壊し、炎の塊が姿を現した。

「は、はははは！ 確か、昼間に会った能力者だったか、惜しかったね。コピー用紙は水に濡れた程度じゃ完全に溶けない。こんな水じゃ僕のルーンは破壊出来ない、魔女狩りの王は破壊出来ない！」
ステイルが殺せと再度命令する必要も無く、魔女狩りの王はその手に握っている十字架を振り下ろす。

標的であるツンツン頭の少年、上条当麻を焼き尽くす為に。

「邪魔だ」

一言。振り返る動作すらいらなかった。

払いのける様に振るったその右手が当たった瞬間、炎の塊は中へ何かが破裂したかの様に四方八方に飛び散った。

「なッ……ばか、な。そんな、何故、魔女狩りの王……魔女狩りの王！」

地面の上でモゾモゾと動く巨人の破片を、すぐるように叫ぶステイル。

「重要なのはコピー用紙じゃない。文字さえ消すことが出来ればそれで魔力の供給は断たれる。水に濡れればインクは落ちちまうだろう」

完全にルーンを破壊出来ていない為、炎は元に戻ろうと細かく動く。

しかし、スプリンクラーの水が出続ける中、確実にインクを削ぎ落されている為かその動きも次第に弱々しくなり、最後には全てが

溶けるように消えていった。

「さて、と」

たったその一言で十分だった。

それだけで、ステイルは体を震わせた。

「ア……」

切り札を失い、冷静さを失った魔術師は、後ずさりしか出来なかった。

その後の行動は至って簡単だった。

上条当麻が突き出した拳がステイルの顔面を捉えるのに時間は掛からなかった。

一瞬、宙を舞ったステイルはそのまま壁に後頭部から激突した。

episode 5

インデックスを背負った上条当麻と神裂火月は裏路地を歩いていた。

不必要にスプリンクラーを発動させてしまった為、すぐにあの寮は消防車と野次馬で溢れかえってしまった。その為、インデックスを連れてその場を離れる必要があった。

「くそ、インデックスを救急車に乗せられない。かと言ってこのまま傷を放って置くわけにもいかない。どうすればいいんだ」

学園都市は基本的に外の人間を嫌う傾向がある。

そのために周囲を壁で覆い、人工衛星が常に監視の目を光らせている。

IDを持たない外の人間であるインデックスが、入院したとなれば情報は一気に広まるだろう。

「大丈夫、だよ？ とにかく血を、止めることが出来れば……」

真っ白だった修道服は背中中の辺りが真っ赤に染まっていた。

口調も弱々しく、暗いため確認はできないが恐らく顔色も悪いだろう。

「なあ」

二人の後ろを歩いていた火月が声をかけた。

「インデックスでよかったよな」

「うん、私の名前は、インデックスだよ。君は、だれ？」

「俺は神裂火月。当麻の友達だ」

正直、傷の深さからあまり喋らさない方が良いのは素人でも見て取れた。

しかし、インデックスは傷を治すために病院に行くわけには行かない。

加えて、当麻も火月も能力者であるが、傷を治す様な力は一切な

い。

ならば、

この状況で頼れるものは何か。

それが例え、思い出したいくない過去を掘り起こす様なモノだったとしても、この状況を回避できるのであれば、最早それに頼るしかない。

「なあインデックス。一〇万三〇〇〇冊の魔道書の中にある傷を癒す術式を教えてください」

——とある魔術の力リスマ—— e p i s o d e s

「なんで、君は、魔術を知ってるの……？」

「そうだ、火月。お前なんで魔術を知ってるんだ？」

立ち止まった当麻が火月へと振り返る。

「……そんな事は後でいいだろ、今はこの子の傷をどうにかする方が先じゃないのか」

話さなければならぬことなのかもしれないが、実際にインデックスの傷をどうにかする方が優先すべき事だった。

「君は、能力者じゃ、ないの？」

「生憎、無能力レベルの能力者だけど……問題ないだろう」

火月の言葉に一瞬の間があった。

「ダメ、君には……教えられない」

かすれそうな声だったが、その中にもその言葉だけ力が込められていたように感じた。

「だろうね」

その答えが返って来るのが分かっていたかのように、火月は振舞った。

「だったら俺が」

当麻がそう言ったが、

「無理だよ」

小さく火月がそう呟いた。

「当麻の右腕はあらゆる異能を打ち消すだろ。それは魔術だって例外じゃないのはさっきの戦いで分かった。当麻が回復魔術を使っても発動しない。その右手が邪魔しちまう。まあ根本的な話したが、能力者って時点でアウトだけだな」

「どついう事だよ」

「能力者には魔術は使えない。魔術ってのは能力者のような『才能ある者』が使うモノじゃない。『才能ない者』が『才能ある者』と同じことをするために生み出されたモノなんだ。だから、『才能ない者』の為に作り出された魔術を、能力者が使うことは出来ない。能力者は脳開発してるだろ？ 回路が違うんだ」

「だったらお前も能力者だろ？」

「俺は……確かに能力者だけど、当麻と違って魔術に関しての知識がある。それに加えて一〇万三〇〇〇冊の魔道書の力を借りれば、傷を癒す魔術くらいなら発動できるハズだ」

「……ダメ」

小さくインデックスが言う。

「例え貴方が……魔術の知識を、持っていたとしても、能力者が……魔術を使えば、体を破壊されちゃう」

え？ と驚いたのは当麻だけだった。

「……もちろん知ってるさ。でも、俺はこの病院に行くことが出来る。例え、どこかが破裂したってここは科学の最先端学園都市だ。きつと元に戻してくれるさ」

「そう言う問題じゃねえだろ！ なんだよ体が破壊されるって、そうなると分かかってさせるとでも——」

「——ならその子の傷はどうする」

ア、と当麻の言葉が止まった。

「今考えられるのはそれしかないだろう。大丈夫、回復魔術くらい

じゃ死ぬことはないさ」

そう言いながら火月は当麻の肩を軽く叩いて歩き始める。
ちくしょう。そんな声がかすかに聞こえた。

自分自身では何も出来ない事を当麻が悔やんでいる声だ。

インデックスの声は聞こえない。

恐らく、本格的に危ない状態になりつつあるのかもしれない。

「この先に公園があつたはずだ。そこで傷を治そう」

裏路地を抜けると大通りがある。

それを越えた所に小さな公園があるハズだ。

いくらなんでも、こんな汚い場所に女の子を触れさせる訳にはい
かなかった。

（魔術……）

前を歩く火月だったが、二人に言っていない事があつた。

（……出来るのか）

火月は、魔術の世界から逃げてきた。

魔力すら練ることを出来なくて、『才能ない者』の為に作られた
魔術すら扱うことの出来なかった。

だが、出来なければ一人の少女の命が失われるかもしれない。

助けなければならぬ。

上条当麻の友達を、助けてあげなければならない。

だが、本当は認めたくなかっただけのかもしれない。

遠い過去から今に至るまで、自分自身が魔術が使えなかったと言
う事を、心のどこかで認めたくなかった。

出来ると信じたかったのだ。

心のどこかにしまい込んでいた想いが、数年ぶりに魔術師と出会
ったために掘り起こされたのだろう。

会話もなく裏路地の出口についた火月は壁に張り付くように外の
様子を伺った。

時間は既に遅いが、大通りともなれば人は多いはずだ。

そんな中を怪我人を背負って横断するとなれば目立つのは当然。

だが、

「大丈夫だ当麻。今日は人が少ない」

いつもは賑わっている大通りだったが、今日に限って人が少なかった。

もしかしたら寮の方に集まっているのかもしれない、などと想いながら人通りの少ない大通りを火月と当麻は横断していく。

もぬけの殻だった。

まるで、この場所を避けているかのように人が誰もいないのだ。

人一人いない。

（人が、誰も……まさか……！？）

何故気がつかなかったのか。

余計な考え事をしていたからか。

ある方法を使えば、意図的に空間から人を遠ざける事など容易な事だ。

人一人いないこの状況。

作り出せるとしたら、

「人払い……ッ！」

「その通りです」

刹那、まるで数十キロにも及ぶ重りを背負わされた様な重圧に襲われた。

「正直、ステイルがやられたと聞いた時驚かされましたが、それならば私がその子を保護すればいいだけの話です」

手の汗が異常なまで溢れ、呼吸が早くなつたのを感じた。

頬からは冷や汗がこぼれ落ち、急激に乾いた喉に無理やりつばを飲み込む。

背後からビリビリと伝わってくる威圧感に押しつぶされそうになるも、それをどうにか耐え、うつ向き加減だった顔をゆっくりとそちらに向ける。

「おい、火月」

上条当麻もその存在に気がついたみたいだった。

ただ、その右手の所為か、火月ほどの重圧や威圧感に襲われている様子はなかった。

「アイツも魔術師か」

上条当麻は二十メートルほど離れた場所に現れた女性を見て呟く。
魔術師。

それだけならまだ良かった。

上条当麻は知らないのだ。

目の前にいる女性が一体誰なのか。

知る由もなく、知らない方が幸せなのかもしれない。

「インデックスを連れて逃げてくれ当麻」

その声は少し震えていたかもしれない。

「なにを――」

「させるとでもお思いですか」

瞬間、真空波の様な風が上条当麻と火月の間を突き抜けた。

踏ん張っていないければ後方へ吹き飛ばされそうな突風。

地面を見れば、二人を挟むように七つの傷跡が地面を走っていた。
「約八年でしょうか。久しぶりの再会と言うのに、かける言葉がこんなモノと言うのは少々残念ではありますが」

と、その女性はいきなり置いて、

「その子を保護したいのですが、素直を渡してくれると助かります。
火月」

「火織姉さん」

そこに現れたのは、

魔術師であり、世界に二〇人といない聖人。

そして、火月の実の姉である、神裂火織だった。

episode 6

聖人。

世界に二〇人といない、生まれた時から神の子に似た身体的特徴・魔術的記号を持つ人間を言う。

神の力をその身に宿す事が出来るが故に、聖人の証『^{ステイグマ}聖痕』を開放した場合に限り、

一時的に人間を超えた力を使うことができる。

言わば、天才と呼べる者達である。

その力は、科学で言うなら各兵器に相当するらしい。

「姉って……魔術師なんだろ？ アイツも」

上条当麻が何かを確認するように訊ねる。

「ああ。神裂火織。俺の実の姉だよ。なら、分かるだろ？ 俺も魔術師だったんだよ」

——とある魔術のカルスマ—— episode 6

「魔術師って、お前能力者じゃなかったのか？」

「ああ、能力者だ。歴とした無能力者^{レベル}のな。だから言ってるだろ、『魔術師だった』って」

説明不足だったのかもしれない。

能力者は魔術を使用することは出来ない。それは頭の回路が異なるため、才能ない者の為に作られた魔術は使用することはできないが、

魔術師は能力者になることが出来る。

ただ、単純に考えれば分かることかもしれないが。魔術と言うのは才能ない者の為に作られた力だ。

その魔術を使う魔術師が、頭の中の回路弄って能力者になった所で、強力な能力に目覚めるハズがない。

結果、神裂火月は能力者になったが、無能力《レベル0》。

そして、もう魔術も使えない。

が、実際火月の場合、

「逃げたのですよ、その子は。魔術の世界からこの学園都市にね」
表情には出さなかったが、火月の閉じた口の中ではクルミでも割れそうなほど歯が噛み締められていた。

そしてわずかに、俯く。

「聞くまでも無いと思いますが、火月。それで貴方には新しい力が備わったのでしょうか？」

火月にとっては辛い一言だった。

それは、魔術の世界を発つ前に姉である神裂火織から言われた事だった。

神裂火織からだけではない。多くの仲間から言われた言葉でもあった。

学園都市に行ったとしても、能力が目覚めるとは限らない。

ならば、

魔術が使える様になるまで、訓練を重ねればいいと。

「その様子では、やはり何の能力も持てなかったようですね。魔力も錬ることが出来なかった者が、超能力に目覚めることなどない。あれほど、私たちが言ったハズです」

「魔術が、使えなかった？」

上条当麻はその言葉に疑問を抱いていた。

何度も言う様に、魔術とは才能ない者の為に作られたモノだ。

「魔術にも何か才能がいるって事なのか？」

「いや、違う」

小さな声だった。

何も傷すら負っていない火月だったが、その声に力はなかった。
小鳥のさえずる様な声しか出ていない。

「魔術つてのは手順さえ踏めば誰でも扱うことが出来るモノなんだ。能力者を除いてな」

「だったら、どうして」

「そんな事すらできないほど落ちこぼれたんだよ。俺はな」

少しの沈黙があった。

「だけど、女の子の背中を切りつける様な落ちこぼれになったつもりはない。姉さん、貴方の『名』はこんな事をするために名乗っていたモノなのか」

インデックスの傷。

それは背中を鋭い刃で引き裂かれたモノだった。

神父の魔術師は炎を操る魔術師だ。

刃物など持ち合わせておらず、例えば炎で刃を具現化したとしてもあのような切り口にはならない。

対して、神裂火織が腰に納めてあるもの。

長さ二メートルにもなる日本刀。

名を『七天七刀』と言う。

十中八九、インデックスの背中への傷はそれによるモノだった。

「魔術を捨てた貴方には関係のないことです」

「姉さんがしてる事、仲間が知ったら——」

「私はもう天草式ではありません。今の私はイギリス清教『必要悪
リウス』の教会』所属、神裂火織です」

天草式十字凄教。

プリエステス

神裂火織が女教皇を務めていた日本の十字教の一派だ。

かつて、火月も天草式に所属していた。

「……天草式を、抜けた？」

「貴方が魔術から逃げた少し後の話です。知らないのも無理は無いでしょう」

「あれだけ慕っていた仲間を捨てたって言うのか！」

「貴方も、魔術を捨てたではありませんか」

「違う。俺は魔術を捨ててはいない」

捨てたのではない。

逃げてしまったのだ。

言うなれば、魔術に捨てられた。

ならば、そこにいる意味があったのだろうか。

皆が、神裂火織を慕っていた。

その弟と言う存在。

聖人である姉の存在は、火月には大きすぎた。

誰もが、神裂火織の弟として火月を見ていた。

だが、火月には魔術を扱う事が出来なかった。

『弟はダメだな』

そんな声が聞こえる事もあった。

『気にする事はないのよな』

そう声をかけてくれる者もいた。

しかし、自分自身が耐えることが出来なかった。

幼き頃に描いていた、姉と共に並び立つと言う想いも、いつしか
プレッシャーでしかなかった。

「まあいいでしょう。捨てた捨てていない、そんな事は所詮どうでも
良い事です。私はただ、その子を保護したいだけなのですよ」

話しを無理やり戻すように、神裂火織は要件を再び述べた。

「渡して頂けますか？」

ゾク、と寒気がするような目だった。

鋭い目で、それだけで心を切り刻まれそうな冷たいモノだった。

睨まれただけで火月は一步後ろへと後退してしまう。

後ろにいた上条当麻からも足を地面に擦らす様な音が聞こえてきた。

「当麻、先に行ってくれ」

「な、何言ってるんだ！ 相手が魔術を使うんだったら俺もいた方が
いいだろう！」

上条当麻の右手には幻想殺しが宿っている。
イマジンプレイカー

それは異能であるならば、どんな攻撃をも防ぐ事が出来る。

「姉さんは魔術なんか使わなくても、俺たちくらいなら一瞬で再起不能に出来ちまう」

聖人はその身に宿す圧倒的な量のテレズマにより腕力や脚力、五感などの身体機能が大幅に強化されており、身体能力は一般の人間など比較にならない。

「貴方に私が足止めできるとでも？ 魔法名すら名乗る必要がありません」

ダン！ と神裂火織が地面を蹴ったと思うと、
「あ……ッ」

その姿は一瞬の間に火月の目の前にあった。
たった一步で一〇メートルはあった距離が詰まった。

ゴキゴキッ、と拳が火月の腹部へと突き刺さる。

「が……は……ッ」

宙に浮いた体は大きく後ろに仰け反り、五メートルは飛ばされた。
地面に背中を打ち付けて、肺から空気が根こそぎ奪われた。

バウンドしてうつ伏せになった火月は痛む腹部に右手を当てて頭だけを前方へ向ける。

「火月！？」

上条当麻がインデックスを背負ったまま火月へと視線を向けていた。

「もう一度問います。その子を保護したいのですが、渡して頂けますか？」

上条当麻に対して鋭い目を向ける神裂火織。

その後ろには彼女の重圧を引き立てる様に建物の隙間を縫って巨大な満月が見えていた。

上から見下ろす神裂火織の目に、火月が映し出されている。

かつて、自分の姉はこんな冷たい眼差しを持っていただろうか。

『救われぬ者に救いの手を』

その言葉には力があつた。

誰もがその言葉を信じて、

誰もがその教えに従った。

（姉さん……）

『私は神様からも見捨てられた人達すら救ってみせたいのですよ』
その言葉ははるか昔のモノだったのだろうか。

自分の追い求めていた姉の姿は、

「俺が目指した……」

記憶の中の産物なのだろうか。

刹那、神裂火織は周囲に異変を感じた。

大通りには街灯や建物からの光である程度の明るさは確保されていた。

それはほんの少しの変化だった。

しかし、五感を研ぎ澄まされ、身体機能が大幅に強化されている
神裂火織には繊細に分かる変化だった。

（影が……？）

明るさの変化。

先ほどまで主に前方に位置していた影の位置がまばらになった。

大きな光の根源を失って、周囲から放たれる光が四方八方へ影を
作り出している。

神裂火織は引き寄せられる様にして顔を後ろへ向けた。

「あれは……」

その目に映し出されたモノ。

建物の隙間を縫って夜空に輝いていた巨大な月。

その月が、三分の一削り取られていた。

それは今も尚、侵食を続けている。

「月食、ですか」

月蝕、とも言われるそれは、まさしく何かに喰われている様にも
見えた。

「……姉さん」

その声に反応する様に神裂火織は月から視線を外して、火月を見た。

それは、不思議な起き方だった。

ふわりと水の中にもいるかのように、重力を無視して火月は立ち上がる。

その足元は地を離れて僅かに浮いている。

力の抜けた体で、火月は顔を上に抜けて目を瞑っていた。

その顔が、神裂火織に向けられる。

ゆっくりと開かれるその瞳に映し出されている世界は何を彩っているのか。

黒色の眼であつたその右目は、まるで侵食された月がそのまま映し出されたかのように黄色に変わっていく。

「何が……？」

スタ、と地に足を付けた火月は瞼を閉じて、

月が全てを侵食されると、その開かれた目は月の代わりと言わんばかりに輝きを放つ。

「俺が目指した姉さんは、こんなんじゃない」

episode 7

神裂火月には奇妙な点がいくつかあった。

一つは魔術を扱えないと言う事。

神裂、と言う名の元に生まれ、神裂火織と言う姉を持つ。

周りから見れば、その存在が異常だった。

すべての才能を姉に持っていていかれた。

そう言う仲間もいた。

魔力を錬ることが出来ないの言うのは、実際可笑しな話だった。
魔力とは生命力から精製される。

普段とは異なる呼吸法などで、血液の流れや内蔵のリズムなどを無理矢理いじることが必要となるが、能力者でもない限り、魔術の使用は可能だった。

能力者であっても、魔術を発動することは出来る。

ただ単に、回路の違いで体への不可が大きく、体を破壊してしまうために使用できないとされているだけなのだ。

そして、もう一つ。

火月は夜になると、不可解な現象に襲われることが度々あった。
手足の痺れ、脱力感、必要以上の睡魔。

オカルトの分野にいても不可思議と思われる現象の数々。

呪いの類ではないかと疑われた事もあったが、それもなかった。

だから、火月は夜は嫌いだった。

二つの事柄を配慮しながら、神裂火織は目の前で起こっている状況を判断するために頭の中で思考を繰り返す。

まずは何が起こったのか。

（あの子に魔術は使えません。使えるはずなのですが、その話は一度置いておきましょう。そして、能力者でもありません。故に、異能とされている力は何一つ有していないはず）

ならばなぜ。

なぜ、神裂火月は地面から数センチ浮いた状態でいたのか。

（むしろあの子にとって夜は何が起こるか分からない時間のハズ。普通に生活するならまだしも、戦闘を行える様な時間ではありません）

そして、まるで月の如く輝きを放つ右目。

（月……）

何かを確認するように神裂火織は体を捻って顔を後ろへ向けた。

（まだ月食は続いているのですか。………続いている？）

ふと疑問に思う。

月食と言つのは、地球が太陽と月の間に挟まれる事で発生するが、（続いているのではありません。光が全くない）

全てが包まれる皆既月食であっても、周囲から光が漏れるモノである。

しかし、今回はそれが全くない。

それこそ、月が丸々全て何かに飲み込まれてしまったように。

それこそ、月が何かに食われたように。

そして、神裂火月の目に浮かび上がる、月の様な黄色。

（水の象徴にして青を司り、月の守護者にして後方を加護する者。いえ、そうであるなら、態々月を失う様な事はしないでしょう。…

…なるほど、少し分かった様な気がします）

神裂火織は鞘へと手を伸ばす。

（魔術が使えず、能力者でもない。魔力を錬ることができずに、夜を嫌う。それは何故か）

その表情はかすかに笑っていた。

謎解きに正解した喜びか、それとも、

別の何かに対するモノなのか。

（才能がない。魔術を扱う事もできないほど。ならば——）

「——神の恩寵を受けてもおかしくはないと言つ事ですね」

今一度、その目を見て言い放つ。

「その賜れしは月の力。魔術でもなく、超能力でもない。言わば」

——とある魔術のカリスマ—— e p i s o d e 7

神裂火月も不思議な感覚に襲われていた。

本来であるなら、夜はダメなのだ。

手足が痺れる事もあれば、脱力感に襲われる事もある。

それは小さき頃から変わらずであり、この学園都市に来てからも変わることはない。

だからこそ、今日は不思議な日だった。

日が沈んでから、一度もその症状が現れる事はなかった。

いつもであるなら、脱力感に見舞われてもおかしくはない時間なのだが、今回は真逆だった。

脱力感ではなく、まるで宙にでも浮いているかのように体が軽いのだ。

そして、今までに感じたことのない、不思議な力の流れを感じる。

「これは……」

自分自身を確認するように、火月は手を見つめる。

火月が首だけで振り向くと、上条当麻は初めて超能力を見た人の様な目をしていた。

「……お前、さっき浮いてたぞ。それにその目」

体が軽くて浮いているように感じていたが、実際には本当に浮いていたのだ。

「体がすごく軽いんだ。自分が自分じゃないみたいに。これなら姉さんを止めれるかもしれない」

未知の力に、多少の戸惑いを感じながらも、それ以上に別の気持ちいが不安や戸惑いを覆い隠していた。

「——神の恩寵を受けてもおかしくはないと言う事ですね」

不意に神裂火織の声が聞こえたので、それに反応して視線を変えると、神裂火織と目が合う。

「その賜れしは月の力。魔術でもなく、超能力でもない。言わば『カリスマ神の賜物』」

「『カリスマ神の賜物』？」

「太古の人々は超自然的な現象などの類の異能をそう呼んでいたそうです。神より授かった特別な能力。今となつては超能力或いは魔術と呼ばれるようになりましたが、今の貴方はまさにそれでしよう。超能力でもなく、魔術でもない。神より与えられた賜物の力」

神裂火織は続けて言う。

「月の力。恐らくその強大な力を持つがあまり、夜になり月が現れた時にその影響で体の自由が効かない事があったのでしよう。全く、大したものですよ。さすがは、神裂を名乗るだけのことはあります」
——そして、さすがは私の弟です。

最後に呟いた一言は火月には聞こえなかっただろうが、なぜか神裂火織の口調はそれまでの冷たい視線とは裏腹に、暖かく聞こえた。
「しかし、だからと言ってその子を回収しない訳にはいきません。貴方がその力を使って、私を止めると言うのでしたらそうするといいでしよう」

「今なら、姉さんを止めれそうな気がするよ」
「戯けを」

しかし、神裂火月は目の前の姉であり、聖人である神裂火織が自分を警戒しているのは見て取れた。

その手が七天七刀の鞘から離れていないからだ。
手の置き場になっている様にも見えるが、いつでも抜刀の動作に入れるように意識を鞘に落としている状態だ。

それだけで、火月は妙な興奮にも似た感覚に襲われていた。
魔術も使えず、能力も使えない、落ちこぼれた自分、あの神裂火織が。

世界に二〇人といない、聖人である姉が。

自分を警戒している。

それは、夢でも見ているかのようにだった。

「姉さんにこの子は渡せない」

「ならば、名を名乗ってでも保護するまでです」

「姉さんに魔法名を名乗る資格があるのか」

それは覚悟の現れ。

自分自身の決意を刻んだ、もう一つの名前。

かつては、自分もその名に憧れ、その名に従いたいと願った。

しかし、その名はどこへ行ってしまったのか。

（女の子一人追いつく為に刻まれた名じゃない）

自分が目指し、仲間が憧れたその姿はどこへいつてしまったのか。

（何でこんな力があるかは分からないけど、姉さんを止められるなら何でもいい）

こんなモノは自分が目指した背中ではない。

火月が思考する中、神裂火織は静かに言い放つ。

それが決めた言葉。

その意思是昔と何も変わっていない。

「一救われぬ者に救いの手を《Salveree000》」

神裂火織が構える。

全長二メートルの七天七刀。

そこから繰り出される『七閃』は一瞬と言われる間に七度殺す事の出来る速度だ。

まともに戦っては大抵の人間なら殺されるのに一瞬も掛からない。だが、火月は今なら言える気がしていた。

かつては、口にすることが出来なかった、心に刻んだ言葉。

この力は魔術ではないと神裂火織は言っていたが、そんな事は関係ない。

拳に力が入った。

一度大きく吸い込んだ息を吐く。

自らの心に刻んだ魔法名を、

その想いを向ける。

「その背中を追い続ける者」《S e c t a 0 0 0 》

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4546x/>

とある魔術のカルスマ

2011年12月3日18時29分発行